

東夷伝 (6) 韓①馬韓



I はじめに

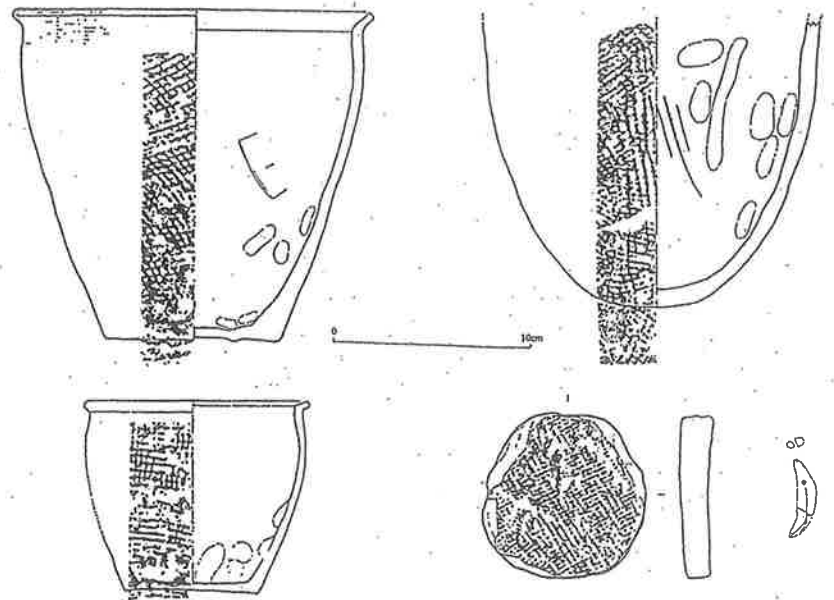
いよいよ韓伝の世界へ

II 韓伝馬韓の条を読む

III 韓伝馬韓条の考古学的アプローチ

IV おわりに

今後の課題



資料 出土遺物

崔盛浩, 1989 『海南郡谷里貝塚』 III

の木にその綱をかけわたし(？)、一日じゅうかけ声をかけながら仕事をする。痛みは感じず、工事がはかどるうえに、お、お、お、とされる。毎年五月に種まきが終ると、鬼神を祭り、人々が群集して歌舞し、昼夜ぶっ通しで酒を飲む。そのときに舞われる舞は、数十人が立って、一つながりになって地を踏み、手足を下げたり高く上げたりして音楽のリズムに合わせる。中国の鐸舞(鐸を持ってまう舞)に似たところがある。十月に農作業が終ったあとにも、同様の行事がある。鬼神を信じ、国々の邑みやこではそれぞれ一人を選んで天神の祭りをつかさどらせ、その者を天君と呼ぶ。またそれぞれの国にはおのおのもう一つの邑みやこがあって、蘇塗そとという名で呼ばれる。そこには、大きな木が立てられ、それに鈴れいと太鼓とをぶら下げて、鬼神の祭祀を行なう。逃亡者たちもその場所に逃げこむと、つれ戻されることのないため、「そこをかくれ家がとして」盛んに悪事をはたらく。蘇塗を立てることの意味は、仏教徒の浮屠ふと(仏塔)と似たところがあるが、そこで行なわれることは、一方は善事、一方は悪事と全然異なっている。彼らのうちでも北部の「楽浪・帯方」郡に近い国々の者たちは、いささか礼儀やならわしをわきまえているが、郡から遠く離れた所に住む者たちは、まったく囚徒や奴婢が集まっているような状態である。特別の珍宝は産出しない。禽獸や草木はほぼ中国と同じである。大きな栗の実を産し、梨ほどの大きさがある。また細尾鶏(長尾鶏)を産し、その尾の長さはみな五尺以上もある。男たちには時に入れ墨をする者がある。また州胡しゅうこと呼ばれる民が、馬韓の西方の海中の大きな島に住む。その人は身の丈がやや小さく、言葉は韓とは異なる。みな頭髪を剃っているのは鮮卑せんびに似ているが、ただ「鮮卑とは違って」韋かわの衣服を着、牛や猪ぶたを盛んに飼う。その着物は上着だけで下はなく、ほとんど裸とかわらない。船で往来し、韓の土地にやってきて交易を行なう。

この地の人々は礼服や幘さく（頭巾）を好み、下戸のものたちが郡の役所に出て目通りをする
と、みな礼服や幘を貸与され、自分で勝手に印綬や礼服や幘をあつらえて身につけるものが
千人以上もいる。

部従事の呉林ごりんは、楽浪郡がもともと韓国を統治していたことから、辰韓の八国を分割して
楽浪郡に併合せせようとしたが、役人や通訳たちがさまざまな意見を述べてまともならずにい
るうち、「韓族の」臣智がその地の人々の怒りをあおり立てて、帯方郡の崎離營きりえい（兵營の名
か）に攻撃をかけた。これに対し「帯方郡」太守の弓遵きゆうじゆんと楽浪太守の劉茂りゆうぼうとは、兵をおこし
て征討を行ない、弓遵はその戦いで死んだが、一つの郡の軍はそのまま進んで韓を亡ぼし
た。

彼らの間の統治機構は未発達で、国々の邑みやこに主帥しゆすい（統率者）はいるが、地方の邑落は無秩
序に散在し、それらをうまくまとめゆく者はいない。彼らにはひざまずいて拝する礼はな
い。その住み家は、草屋根で土かべをめぐらせた建物で、形は冢つかのよう、入口はその上部に
ある。一家すべてがその中で暮らし、長幼男女の別がない。その埋葬には、槨かく（墓室）はあ
るが棺は用いない。牛や馬に乗ることを知らず、牛や馬はすべて副葬品にあてられてしまう。
璽えい（玉に似た美しい石）や珠（真珠）を財宝とし、上着に縫いつけて飾りとしたり、首や耳に
ぶらさげたりする。金や銀、錦や繡は珍重されない。人々の性格は気が強くて勇敢で、頭髪
をぐるぐるまきにして結ただけで、なにもかぶらない。その格好は、炁けい（炁母？）の兵士
たちと似ている。布製の袍わたいれを着て足には革の躡躑きようとう（くつの一）をはく。その国都で大事業
がおこされたり官の命令で城郭を築いたりするときには、若者たちの中でも勇敢で意気盛ん
な者たちは、それぞれに背中の皮に穴をあけ、太い綱でその穴を貫いて、さらに一丈ばかり

報告がゆき、郡ではすぐさま廉斯鏑を通訳の任にあてると、岑中せんちゆうから大きな船に乗って辰韓に侵入し、戸来の仲間の捕虜になっている者たちを迎え取らせた。そのとき、なお千人を收容することができたが、五百人はすでに死んでいた。廉斯鏑はそこで辰韓にむかって宣言した、「五百人をかえせ。もしかえさぬときには、楽浪郡は一万の兵を船で遣り、おまえたちに攻撃をかけるだろう。」辰韓のほうはいった、「五百人はもう死んでしまったので、かわりにその賠償をさせてほしい。」そこで辰韓からは一万五千人の人間を出させ、弁韓からは一万五千匹の布を出させ、廉斯鏑はそれらの賠償を受けとって帰還した。郡の役所は廉斯鏑の功績と義挙とを上表し、冠幘かぶりものと田宅が彼に下賜された。その子孫は数代つづいて、安帝の延光四年（一二五）になっても、以前どおり徭役免除の特権を受けていた。

桓帝から靈帝の末年にかけてのころ（一四七―一八九）になると、韓濊わい（韓に近接した濊族？）の力が盛んとなって、楽浪郡やその配下の県のの力ではそれを制することができず、民衆は多く韓國に流入した。建安年間（一九六―二二〇）、公孫康は屯有とんゆう県以南の辺鄙な土地を分割して帯方郡を作り、公孫模や張敞らを遣ってこれまで取り遺のこされていたその地の中国の移住民たちを結集し、兵をおこして韓濊をうたせた。その結果、韓國に流入していた移住民たちも少しずつ戻ってくるようになった。これ以後、倭と韓とは帯方郡の支配を受けることになった。景初年間（二三七―二三九）、明帝は帯方太守に任じた劉昕りゆうしんと、楽浪太守に任じた鮮于嗣せんうしとを遣り、秘密裏に海からそれぞれの郡に入って郡を平定させた。「そうしたあと」韓の諸国の臣智たちには邑君の印綬いんじゆを授け、それに次ぐ実力者たちには邑長の位号を授けた。

固めたいと希望した。準は彼を信任し重く用いて、博士の官を授け、圭けい（瑞玉―諸侯の身分を象徴する）を賜わり、百里の土地に封じて、西の国境の守りに当らせた。衛満は逃亡者たちに誘いをかけ、その配下に付くものがだんだん多くなった。そこで衛満は使者を遣おくると、準に対し、漢の兵が十の道に分かれて攻め寄せてきた、と嘘の報告をし、王宮に軍を入れて防備にあたりたいと願い出て、そのままほこ先をかえして準に攻撃をかけた。準は衛満と戦ったが、全然相手にならず、簡単に敗れた。

〔二〕『魏略』にいう。準の息子や親族で国に留まった者たちは、こうしたことから韓氏を名のった。準が大海のほとりの地に君臨するようになってからは、もとの朝鮮との関係は絶えた。

〔三〕『魏略』にいう。「朝鮮王の」右渠うきよがまだ国を亡ぼさぬとき、朝鮮国の相しやうの官にあつた歴谿れきけい卿は、右渠に諫言をしたが取り上げられず、東に走って辰国に行った。このとき彼に従って移住した民が二千余戸にのぼり、以後彼らは朝鮮や真蕃しんぱん（番）郡とは交渉をもたなかつた。王莽おうもうの地皇年間（二〇―二三）になって、廉斯鏞れんしきゆうが辰韓ちんかんの右渠帥うきよすいとなると、楽浪郡は地味が豊かで、民衆は豊かな生活を楽しんでいると聞き、逃亡して楽浪に投降しようと考えた。その邑落を出たところで、田の中で雀をおっている一人の男に出会った。その男の言葉は韓の国のもものではなかつた。彼に尋ねると、答えていった、「おれは漢人で、戸来こらいという名だ。おれたちの仲間千五百人が木を伐っているとき、韓の襲撃を受けてとらえられ、みんな髪を切られて奴隷にされた。もう三年になる。」廉斯鏞がいった、「おれは漢の楽浪郡に投降しようと思うのだが、おまえも行くつもりはあるか。」戸来はいった、「いきましよう。」廉斯鏞はそこで戸来をひきつれて含資がんし県けんの役所に出頭した。県から郡に

名のつた。^(二二) その王系は絶えたが、現在も韓の国にはその祭祀を続けている者がある。漢の時代には楽浪郡の支配下に置かれ、季節ごとに役所にやってきて朝謁をしていた。^(二三)

「一」『魏略』にいう。むかし箕子の子孫である朝鮮侯は、周王朝が衰え、燕国が勝手に王を僭称し、東方の土地の侵略を企てているのを見ると、自分もまた勝手に王を称し、兵を動員して燕をむかえ撃ち、周の王室の権威を高めようと考えた。その大夫の礼がそれを諫めたので、さたやみとなった。「かわりに」礼を使者に立て、西方の燕に行つて説得させると、燕は礼を抑留するとともに、朝鮮への討伐はとりやめた。そのうち朝鮮王の子孫がだんだん驕り高ぶつて無道なことをするようになる、燕は部将の秦開を遣つて朝鮮の西部地域を攻めさせ、二千余里の土地を奪つて、満番汗まで兵を進めると、そこを燕と朝鮮との境界とした。朝鮮は、これ以後、力を失つていった。秦が天下を統一すると、蒙恬に命じて長城を築かせ、その工事は遼東にまで及んだ。当時、朝鮮王の否が位にあった。否は、秦からの襲撃を畏れて、ひとまず秦に服属する格好を取つたが、秦の朝廷に参内することは肯じなかつた。否が死ぬと息子の準が位についた。二十年あまりがたち、陳勝や項羽が秦に反抗して蜂起し、天下は乱れた。燕や斉や趙の地の民衆は戦乱を愁えきらつて、しだいに準のもとに逃げこむ者が多くなつた。準は、こうした人々を国の西部に居住させた。漢の王朝が盧縮を燕王に封ずると、朝鮮は燕と涇水で境を接することになった。盧縮が謀叛をおこし、匈奴に逃げこむと、燕の住人であった衛満も亡命し、土着人の服装をして涇水を東に渡り、準のもとに降服を申し入れてきた。衛満は準を説いて、西部の地域に住み、中国から亡命してきた者たちを自分の配下に入れて、朝鮮のためにその地で守りを

韓は、帯方郡の南にあり、東西は海で限られ、南は倭と境を接して、その広さは縦横四千里ばかりである。三つの種族があつて、一つは馬韓、二つめは辰韓、三つ目は弁韓である。辰韓というのは、古の辰国である。

馬韓は三韓のうちの西部に位置する。その民は定住して、穀物を植え、蚕桑の技術を知っていて、綿や布を作る。それぞれに長帥（酋長）がおり、大きなものは自らを臣智と呼び、それに次ぐものは邑借と呼ばれる。海山の間にはちらばって住まいし、城郭はない。爰襄国・牟水国・桑外国・小石索国・大石索国・優休牟涿国・臣漬沽国・伯济国・速盧不斯国・日華国・古誕者国・古離国・怒藍国・月支国・咨離牟盧国・素謂乾国・古爰国・莫盧国・卑離国・占離卑国・臣釁国・支侵国・狗盧国・卑弥国・監奚卑離国・古蒲国・致利鞠国・冉路国・児林国・駟盧国・内卑離国・感奚国・万盧国・辟卑離国・白斯烏旦国・一離国・不弥国・支半国・狗素国・捷盧国・牟盧卑離国・臣蘇塗国・莫盧国・古臘国・臨素半国・臣雲新国・如来卑離国・楚山塗卑離国・一難国・狗奚国・不雲国・不斯漬邪国・爰池国・乾馬国・楚離国など、全部で五十余国がある。大きな国は一万余家、小さな国は数千家で、全部あわせると十余万戸になる。辰王は月支国にその宮廷を置いている。臣智の位のものには、優呼臣雲遣支報安邪馱支漬臣離兒不例拘邪秦支廉（？）という称号が加えられることもある。魏率善・邑君・婦義侯・中郎将・都尉・伯長といった官が置かれている。

朝鮮侯の準は朝鮮王を僭称していたが、燕から逃亡してきた衛満の攻撃を受けて国を奪われ、その側近と宮女をひきつれて海に浮かび、韓の地に住み家を定めると、勝手に韓王を

桓、靈之末，韓濊彊盛，郡縣不能制，民多流入韓國。建安中，公孫康分屯有縣以南荒地爲帶方郡，遣公孫模、張敞等收集遺民，興兵伐韓濊，舊民稍出，是後倭韓遂屬帶方。景初中，明帝密遣帶方太守劉昕、樂浪太守鮮于嗣越海定二郡，諸韓國臣智加賜邑君印綬，其次與邑長。其俗好衣幘，下戶詣郡朝謁，皆假衣幘，自服印綬衣幘千有餘人。部從事吳林以樂浪本統韓國，分割辰韓八國以與樂浪，吏譯轉有異同，臣智激韓忿，攻帶方郡崎離營。時太守弓遵、樂浪太守劉茂興兵伐之，遵戰死，二郡遂滅韓。

其俗少綱紀，國邑雖有主帥，邑落雜居，不能善相制御。無跪拜之禮。居處作草屋土室，形如冢，其戶在上，舉家共在中，無長幼男女之別。其葬有槨無棺，不知乘牛馬，牛馬盡於送死。以瓔珠爲財寶，或以綴衣爲飾，或以縣頸垂耳，不以金銀錦繡爲珍。其人性彊勇，魁頭露紒，如炁兵，衣布袍，足履革躡躅。其國中有所爲及官家使築城郭，諸年少勇健者，皆鑿脊皮，以大繩貫之，又以丈許木錘之，通日曬呼作力，不以爲痛，旣以勸作，且以爲健。常以五月下種訖，祭鬼神，羣聚歌舞，飲酒晝夜無休。其舞，數十人俱起相隨，踏地低昂，手足相應，節奏有似鐸舞。十月農功畢，亦復如之。信鬼神，國邑各立一人主祭天神，名之天君。又諸國各有別邑，名之爲蘇塗。立大木，縣鈴鼓，事鬼神。諸亡逃至其中，皆不還之，好作賊。其立蘇塗之義，有似浮屠，而所行善惡有異。其北方近郡諸國差曉禮俗，其遠處直如囚徒奴婢相聚。無他珍寶。禽獸草木略與中國同。出大栗，大如梨。又出細尾雞，其尾皆長五尺餘。其男子時時有文身。又有州胡在馬韓之西海中大島上，其人差短小，言語不與韓同，皆髡頭如鮮卑，但衣韋，好養牛及豬。其衣有上無下，略如裸勢。乘船往來，市買韓中。

狗奚國、不雲國、不斯潰邪國、爰池國、乾馬國、楚離國，凡五十餘國。大國萬餘家，小國數千家，總十餘萬戶。辰王治月支國。臣智或加優呼臣雲遣支報安邪跋支潰臣離兒不例拘邪秦支廉之號。其官有魏率善、邑君、歸義侯、中郎將、都尉、伯長。

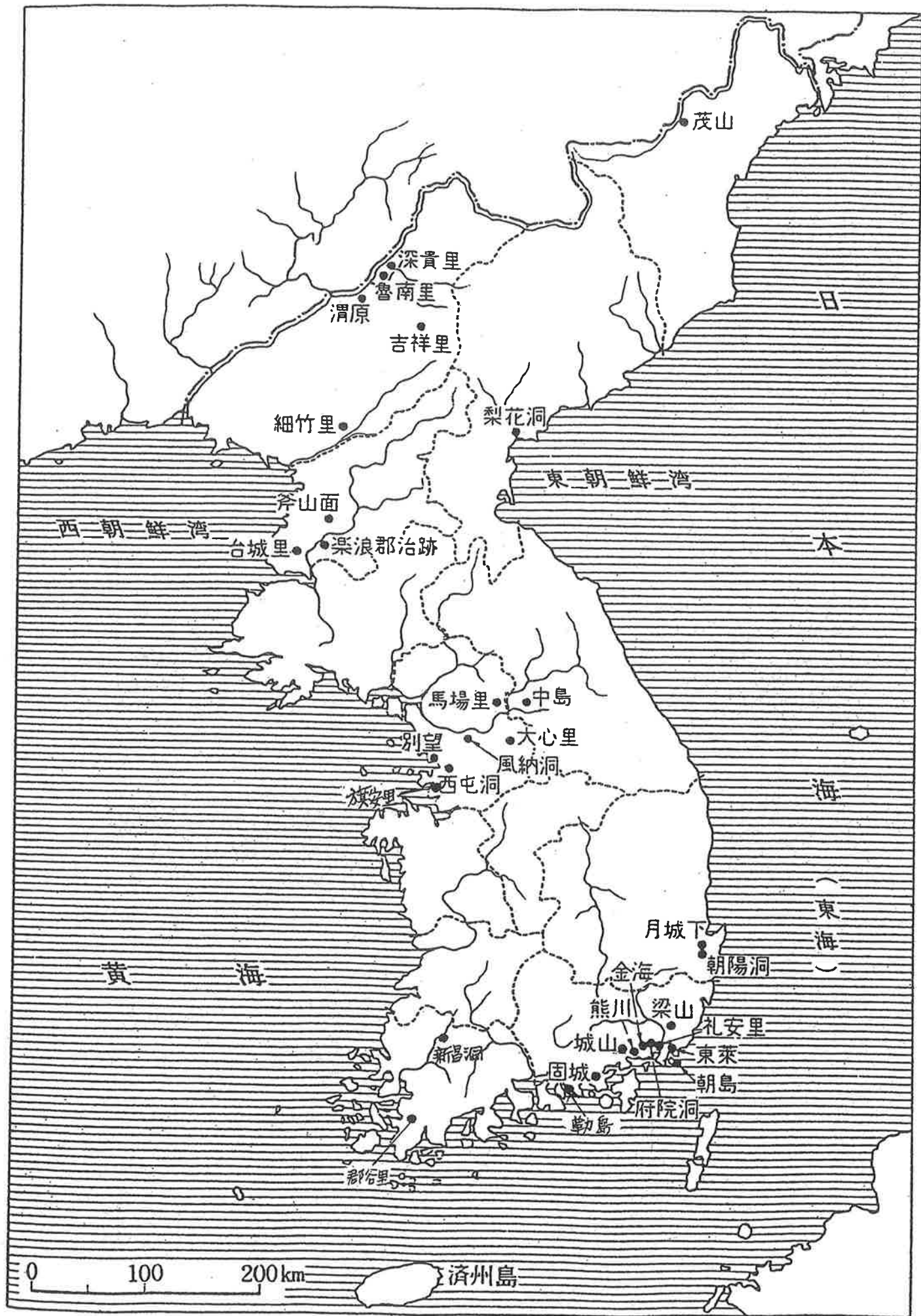
侯準既僭號稱王，爲燕亡人衛滿所攻奪，^{〔一〕}將其左右宮人走入海，居韓地，自號韓王。^{〔二〕}其後絕滅，今韓人猶有奉其祭祀者。漢時屬樂浪郡，四時朝謁。^{〔三〕}

^{〔一〕}魏略曰：昔箕子之後朝鮮侯，見周衰，燕自尊爲王，欲東略地，朝鮮侯亦自稱爲王，欲與兵逆擊燕以尊周室。其大夫禮諫之，乃止。使禮西說燕，燕止之，不攻。後子孫稍驕虐，燕乃遣將秦開攻其西方，取地二千餘里，至滿番汗爲界，朝鮮遂弱。及秦并天下，使蒙恬築長城，到遼東。時朝鮮王否立，畏秦襲之，略服屬秦，不肯朝會。否死，其子準立。二十餘年而陳、項起，天下亂，燕、齊、趙民愁苦，稍稍亡往準，準乃置之於西方。及漢以盧縮爲燕王，朝鮮與燕界於涓水。及綰反，入匈奴，燕人衛滿亡命，爲胡服，東度涓水，詣準降，說準求居西界，^{〔故〕}^{〔收〕}中國亡命爲朝鮮藩屏。準信寵之，拜爲博士，賜以圭，封之百里，令守西邊。滿誘亡黨，衆稍多，乃詐遣人告準，言漢兵十道至，求入宿衛，遂進攻準。準與滿戰，不敵也。

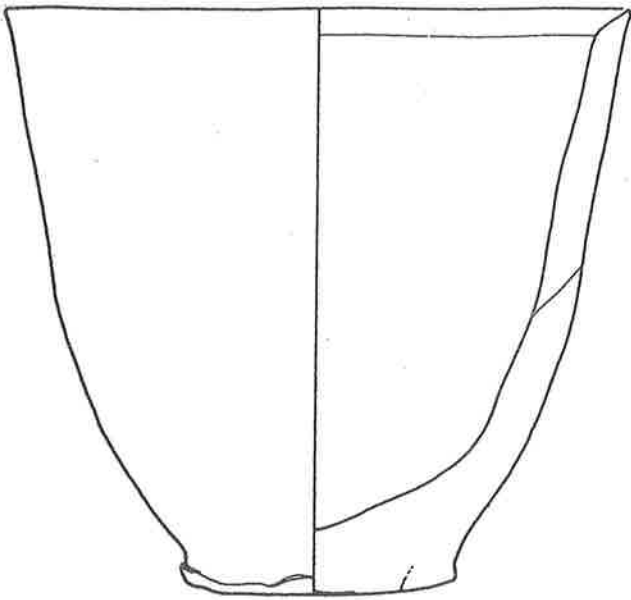
^{〔二〕}魏略曰：其子及親留在國者，因冒姓韓氏。準王海中，不與朝鮮相往來。

^{〔三〕}魏略曰：初，右渠未破時，朝鮮相歷谿卿以諫右渠不用，東之辰國，時民隨出居者二千餘戶，亦與朝鮮貢蕃不相往來。至王莽地皇時，廉斯鑼爲辰韓右渠帥，聞樂浪土地美，人民饒樂，亡欲來降。出其邑落，見田中驅雀男子一人，其語非韓人。問之，男子曰：「我等漢人，名戶來，我等輩千五百人伐材木，爲韓所擊得，皆斷髮爲奴，積三年矣。」鑼曰：「我當降漢樂浪，汝欲去不？」戶來曰：「可。」^{〔辰〕}鑼因將戶來^{〔來〕}出詣含資縣，縣言郡，郡即以鑼爲譯，從岑中乘大船入辰韓，逆取戶來。降伴輩尙得千人，其五百人已死。鑼時曉謂辰韓：「汝還五百人。若不者，樂浪當遣萬兵乘船來擊汝。」辰韓曰：「五百人已死，我當出贖直耳。」乃出辰韓萬五千人，并韓布萬五千匹，鑼收取直還。郡表鑼功義，賜冠幘、田宅，子孫數世，至安帝延光四年時，故受復除。

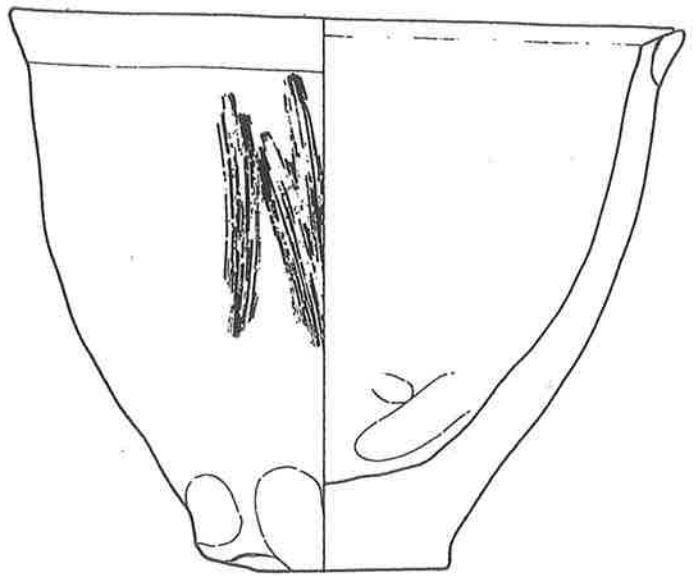
韓在帶方之南，東西以海爲限，南與倭接，方可四千里。有三種，一曰馬韓，二曰辰韓，三曰弁韓。辰韓者，古之辰國也。馬韓在西。其民土著，種植，知蠶桑，作綿布。各有長帥，大者自名爲臣智，其次爲邑借，散在山海間，無城郭。有爰襄國、牟水國、桑外國、小石索國、大石索國、優休牟涿國、臣濱沽國、伯濟國、速盧不斯國、日華國、古誕者國、古離國、怒藍國、月支國、咨離牟盧國、素謂乾國、古爰國、莫盧國、卑離國、占離卑國、臣釁國、支侵國、狗盧國、卑彌國、監奚卑離國、古蒲國、致利鞠國、冉路國、兒林國、駟盧國、內卑離國、感奚國、萬盧國、辟卑離國、白斯烏旦國、一離國、不彌國、支半國、狗素國、捷盧國、牟盧卑離國、臣蘇塗國、莫盧國、古臘國、臨素半國、臣雲新國、如來卑離國、楚山塗卑離國、一難國、



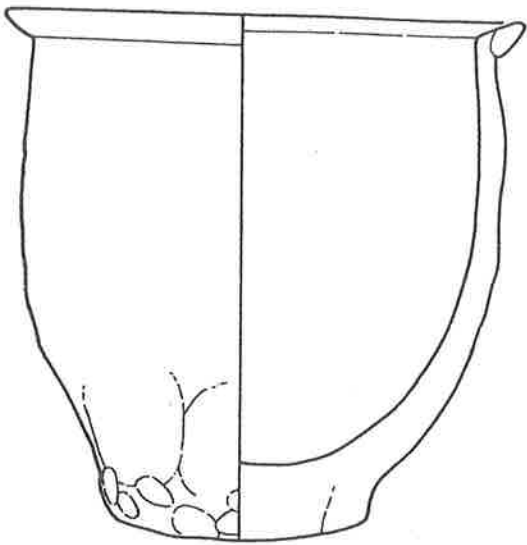
原三国文化主要遺跡分布図



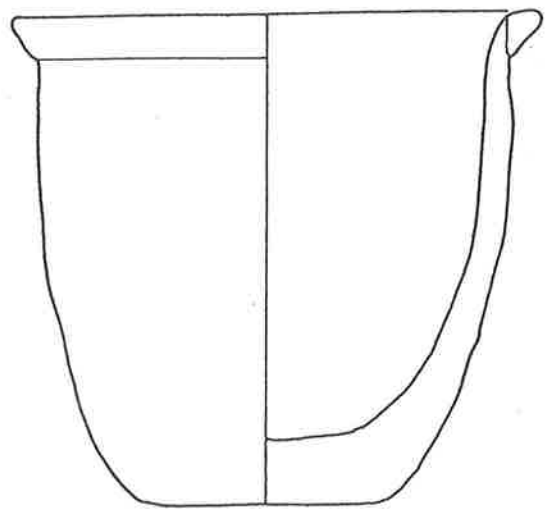
①



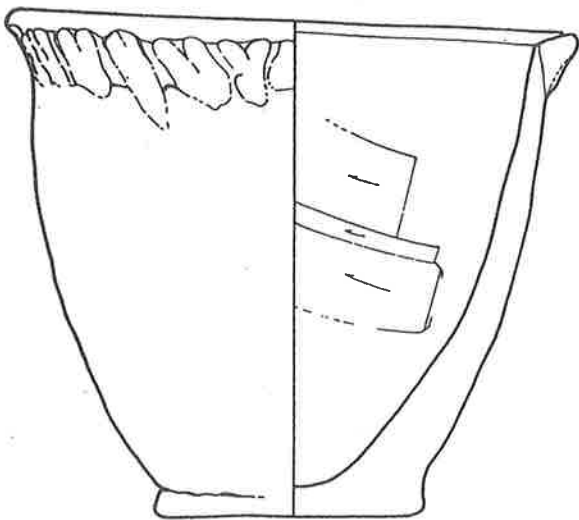
②



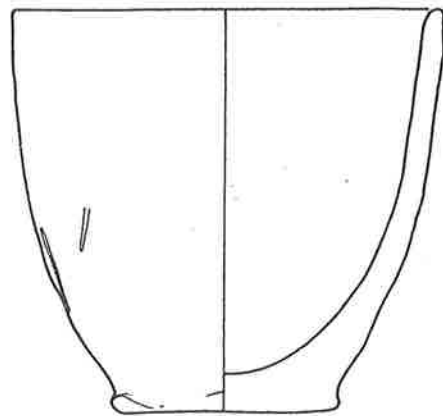
③



④



⑤

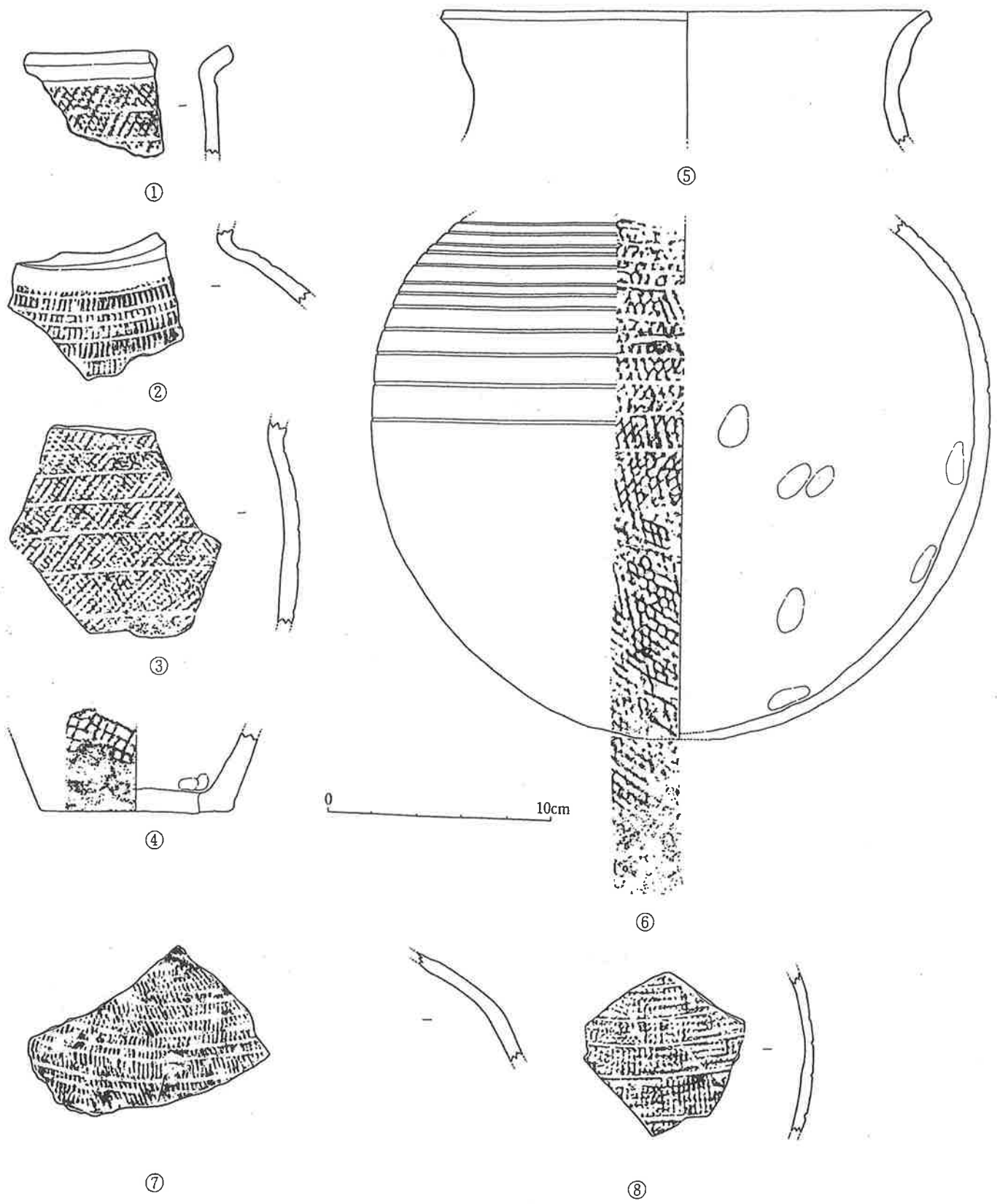


⑥

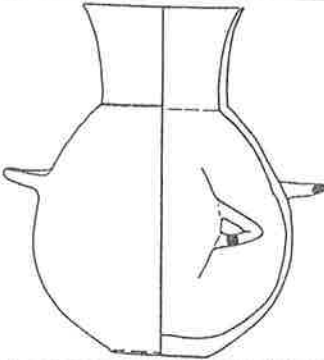

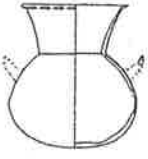
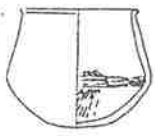
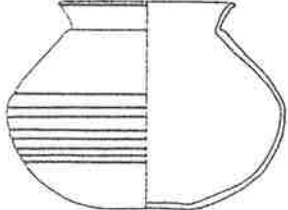
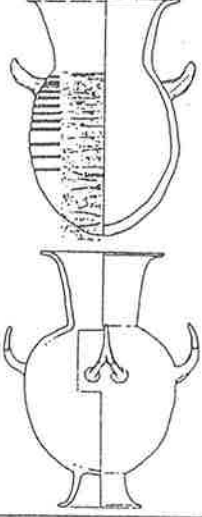

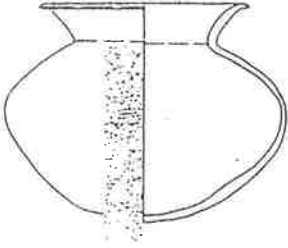
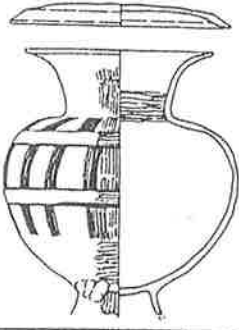
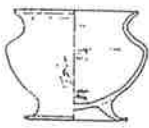
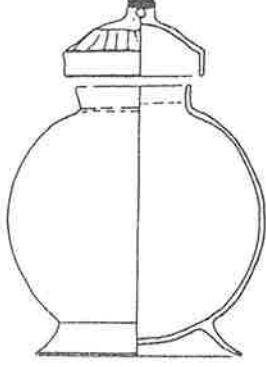
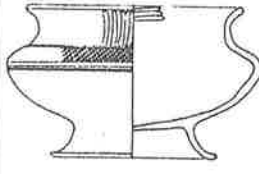
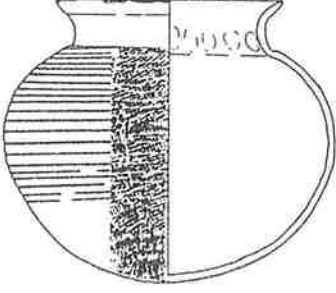
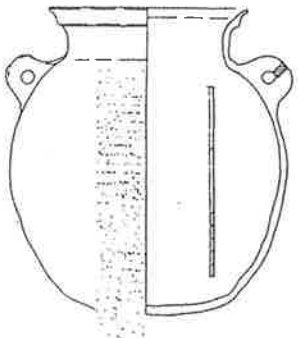
0 5 10cm

深鉢形土器

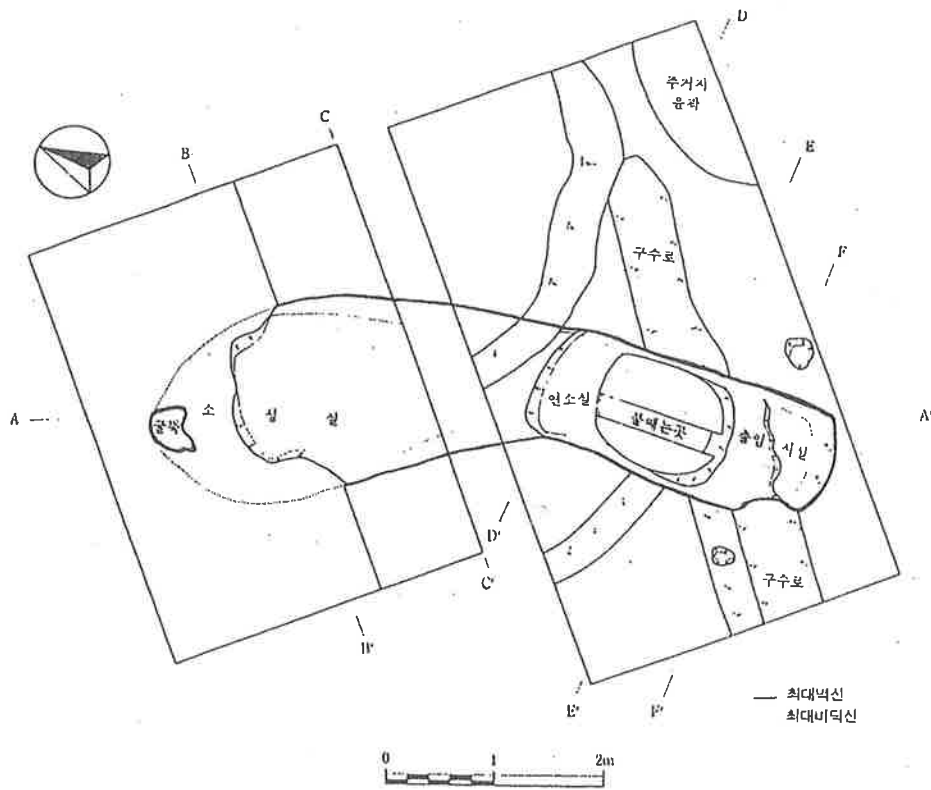
海南·郡谷里遺跡



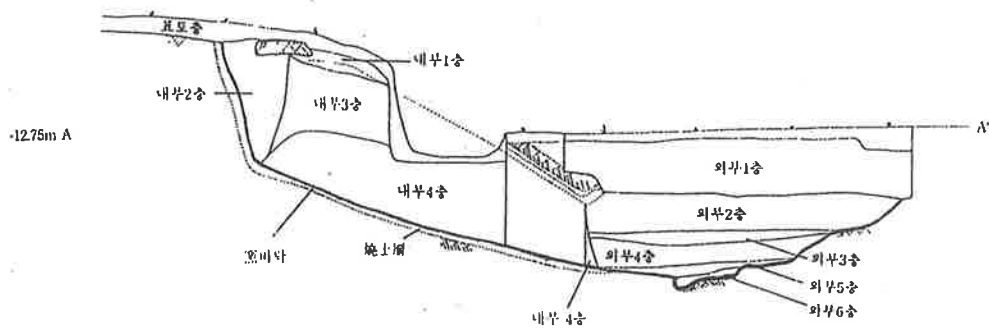
赤褐色軟質土器(①~④), 灰青色硬質土器(⑤・⑥), 灰色軟質土器(⑦・⑧)

	長頸壺	提袋形壺	短頸壺	耳付壺
I 期				
II 期				
III 期				
IV 期				
V 期				

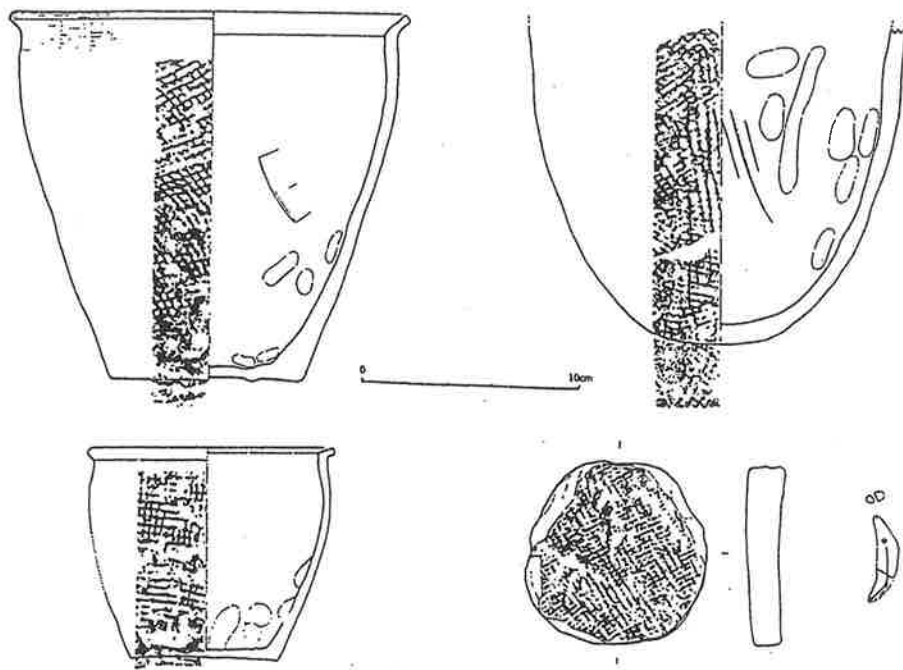
原三國時代瓦質土器編年表 (李章文氏) 1989



全羅南道 海南郡 松亭面 谷里

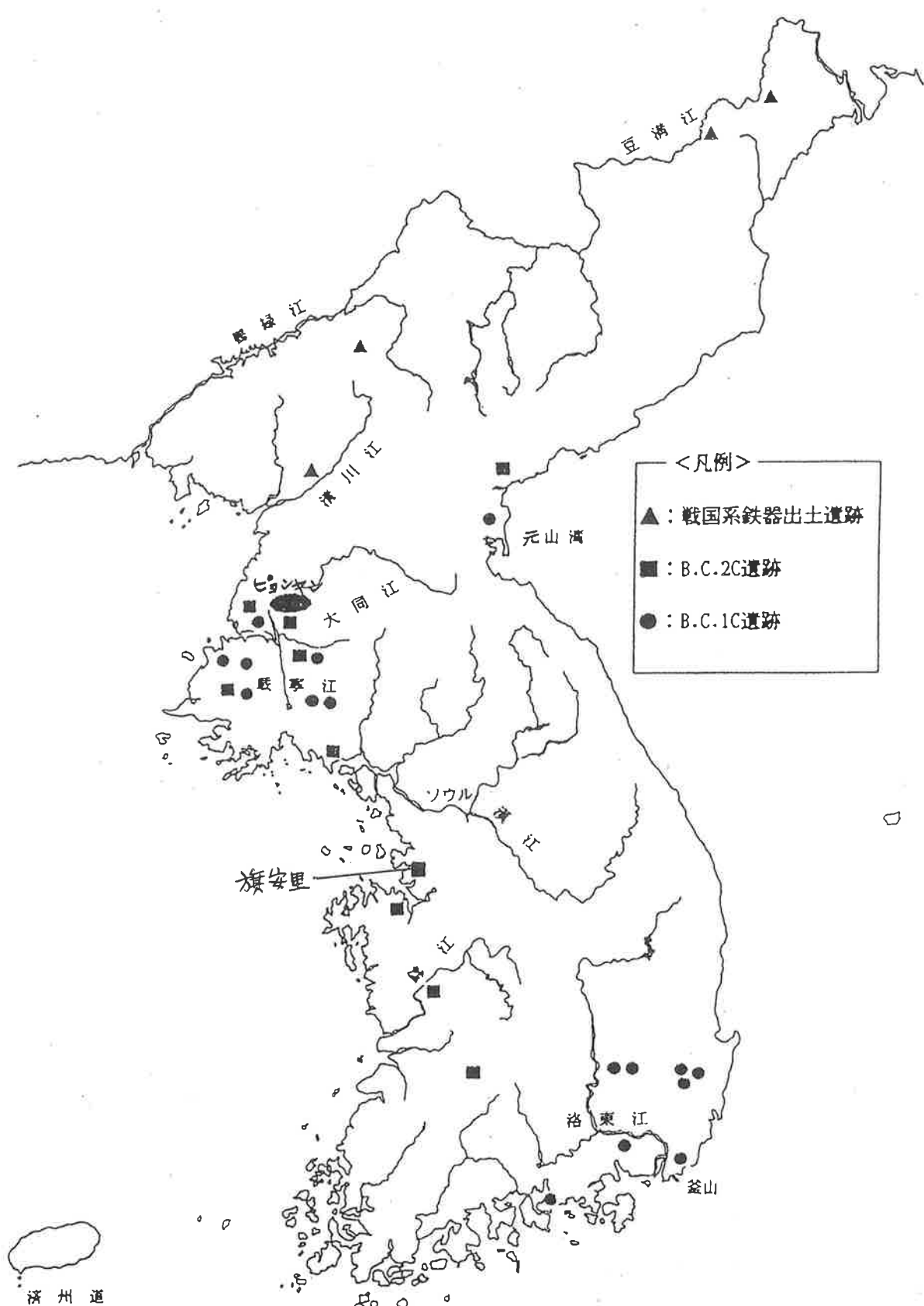


土器窯址 平面圖 및 斷面圖



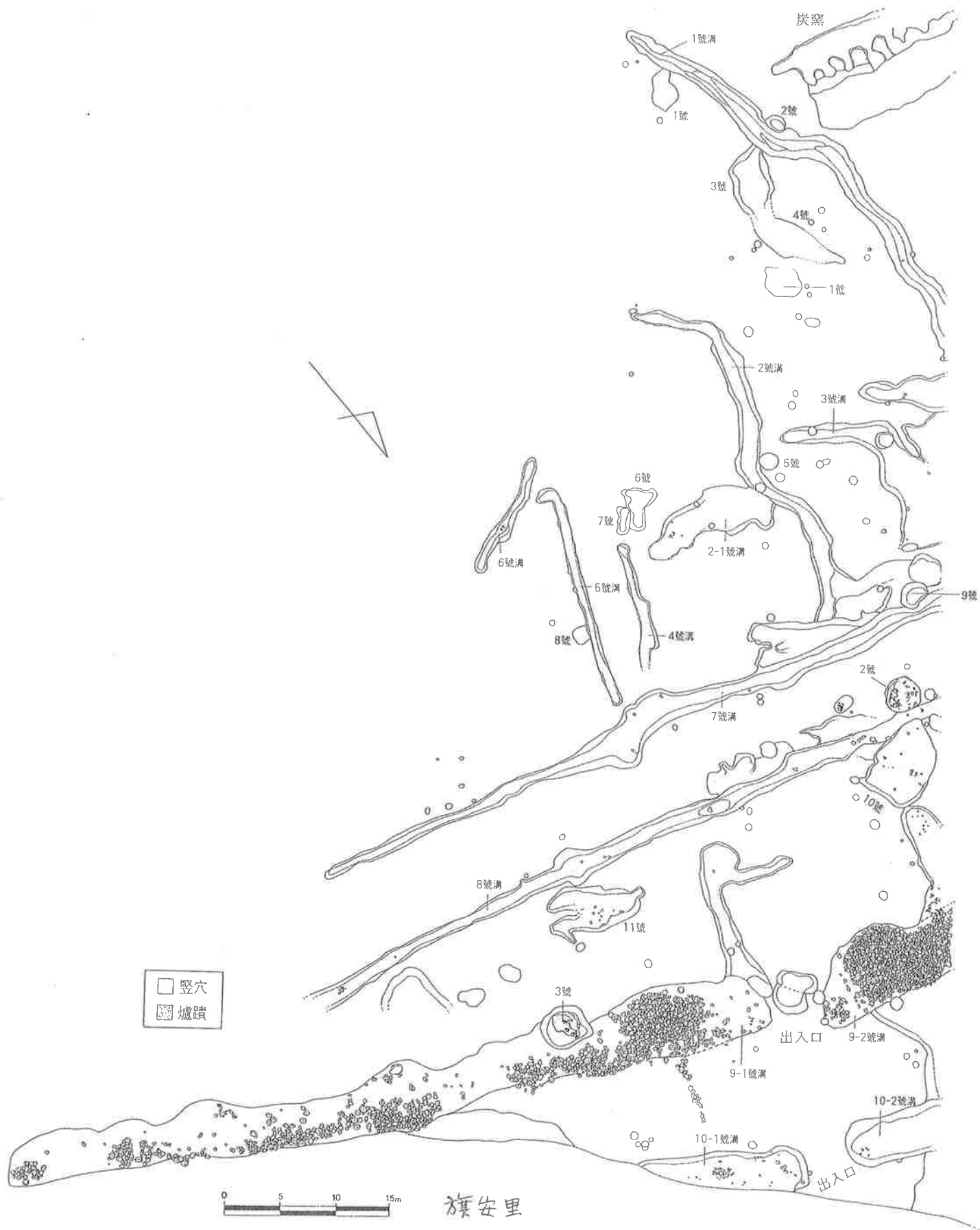
圖中 出土遺物

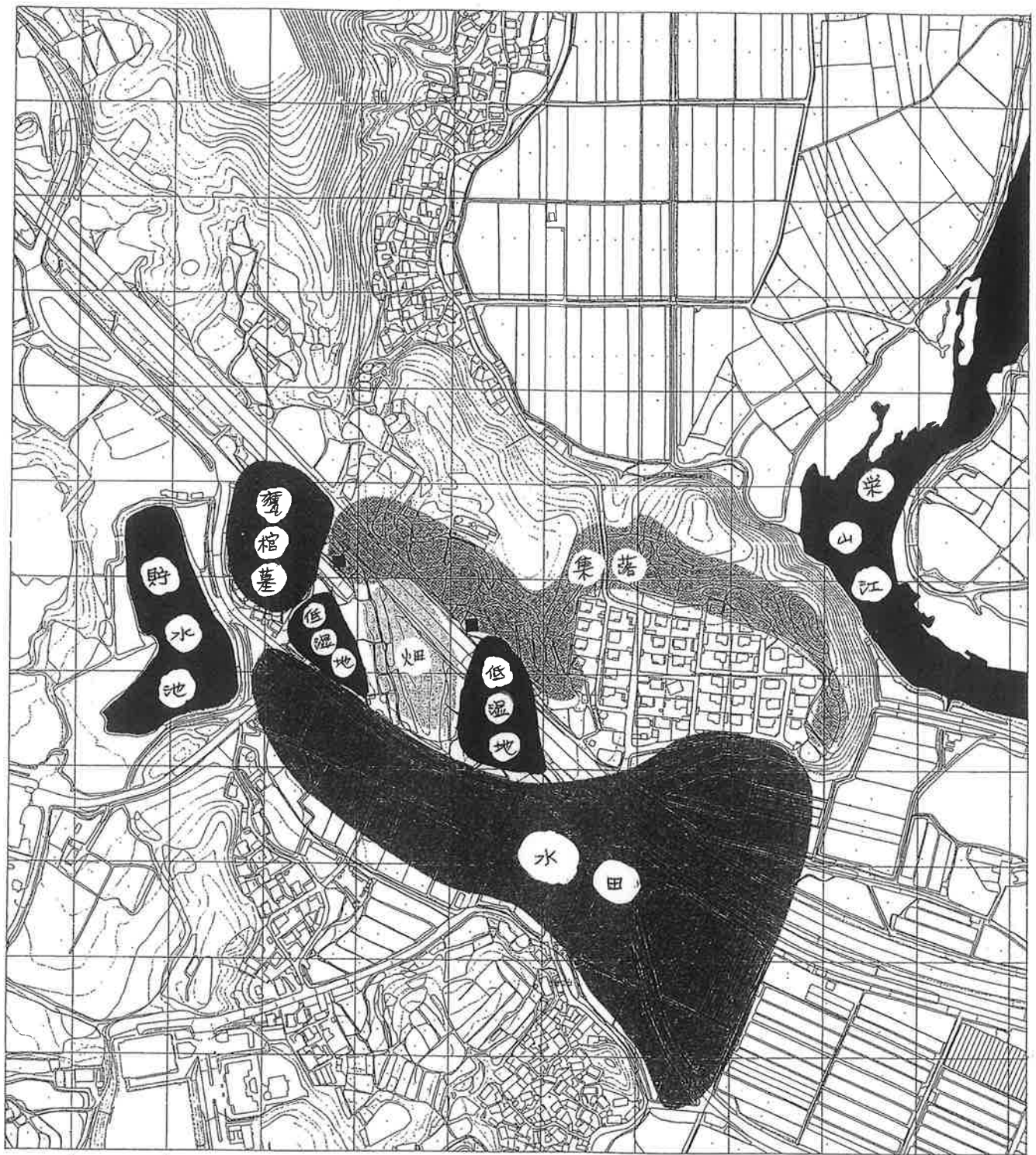
崔盛浩, 1989 『海南郡谷里貝塚』 III



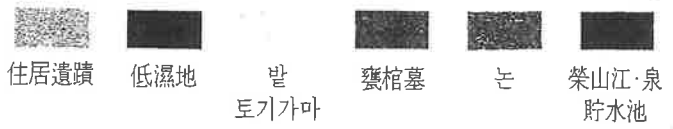
朝鮮半島の重要な初期鉄器遺跡分布

たちろ研究会, 1993 『東アジアの古代鉄文化』

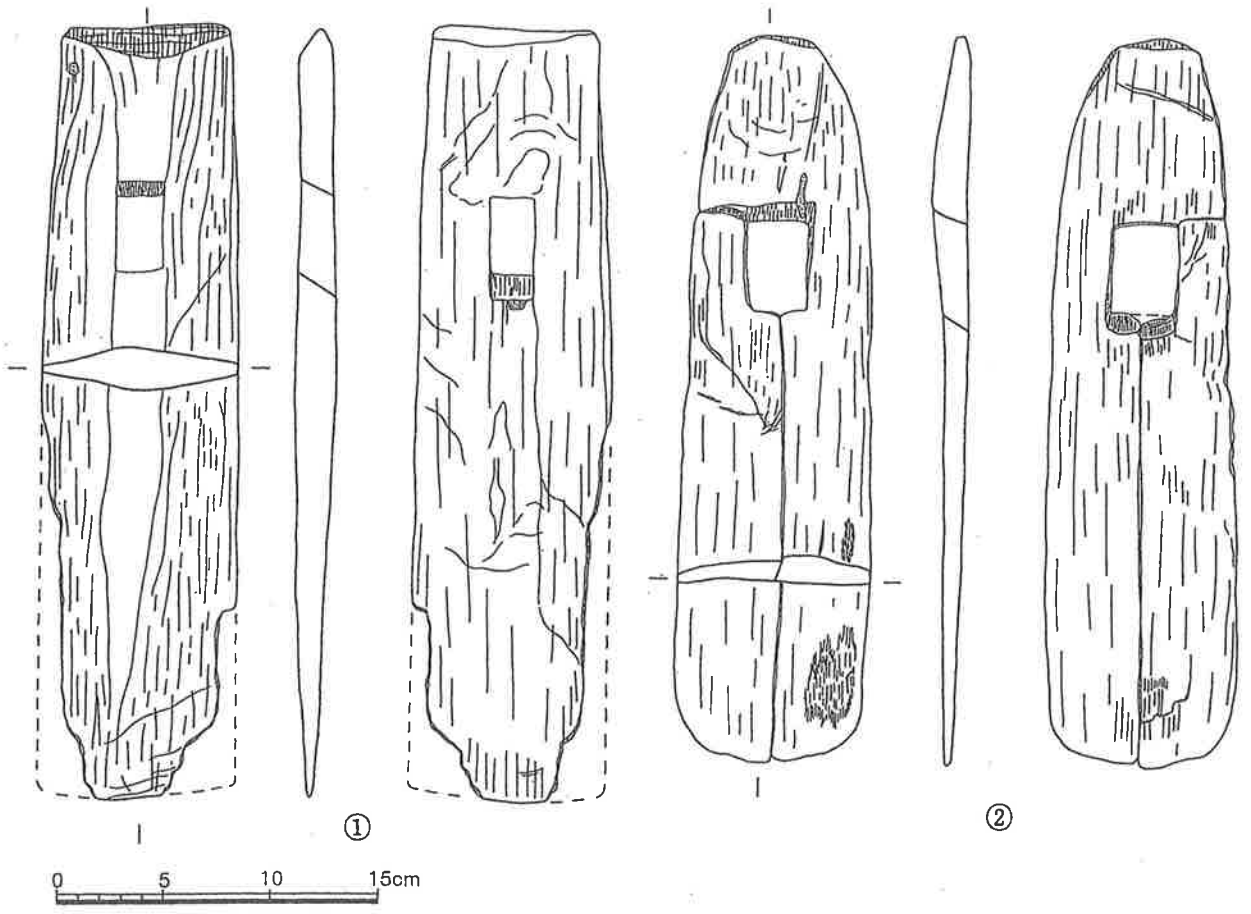




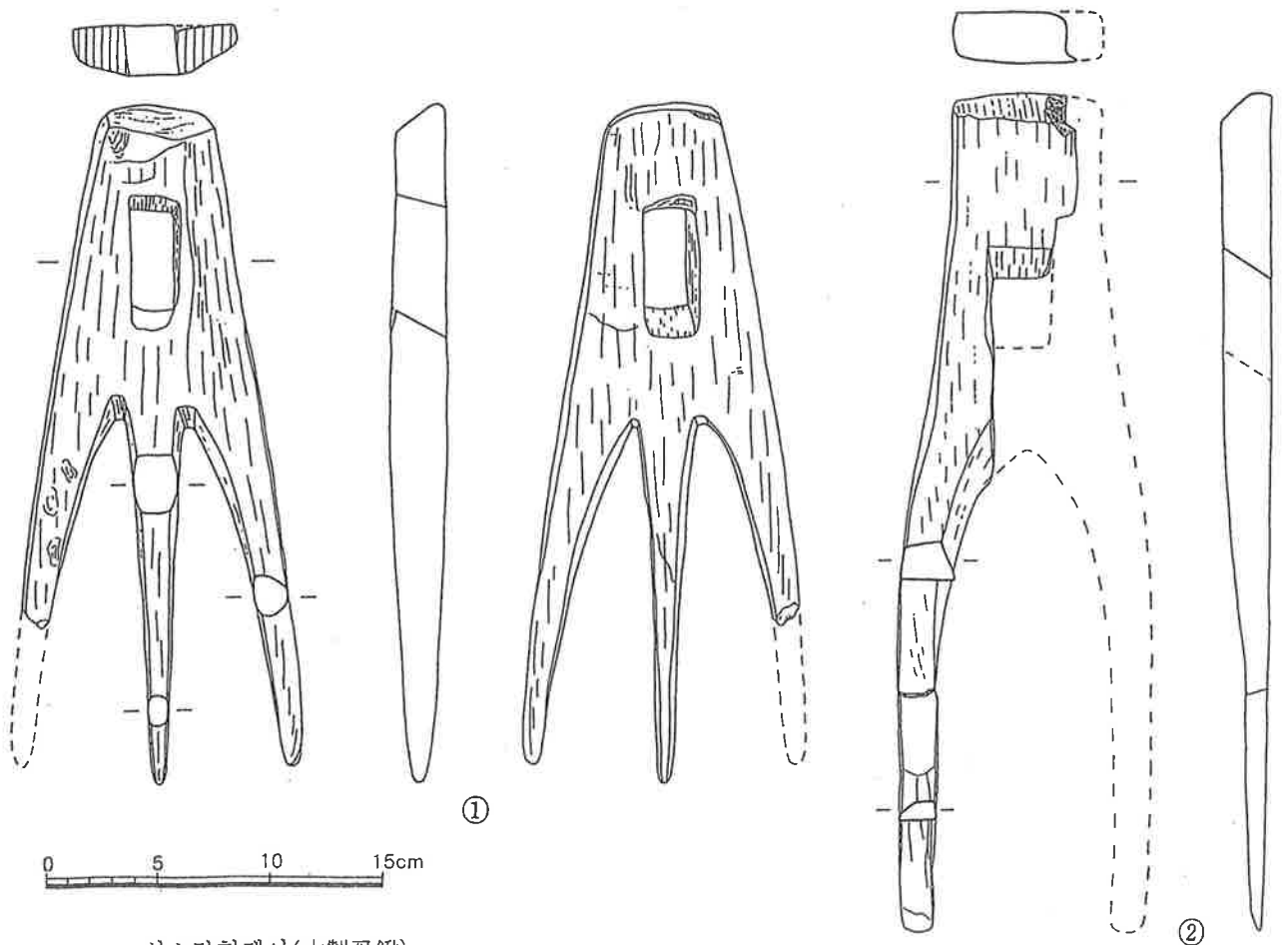
0 5 10 15cm



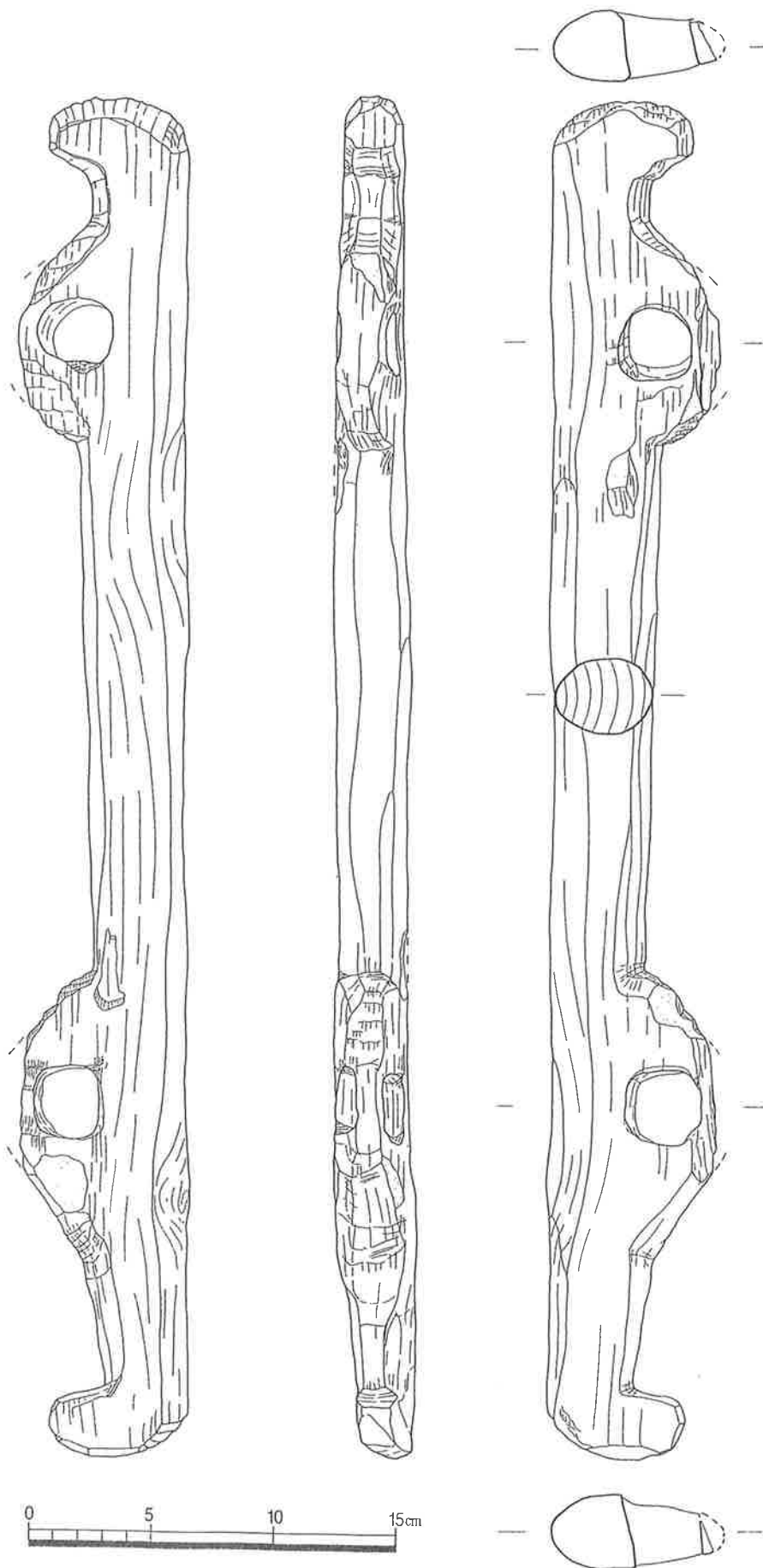
신창동유적의 개념도(新昌洞遺蹟 概念圖, 1/2,500)



목제괭이(木製直柄鍬)

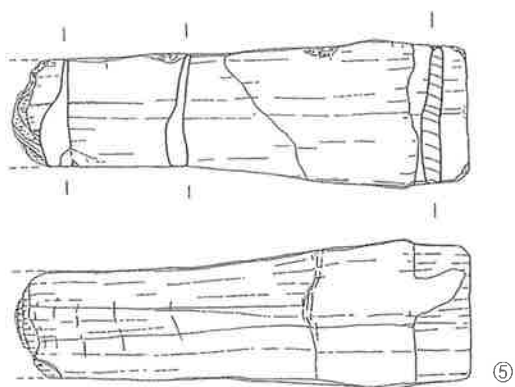
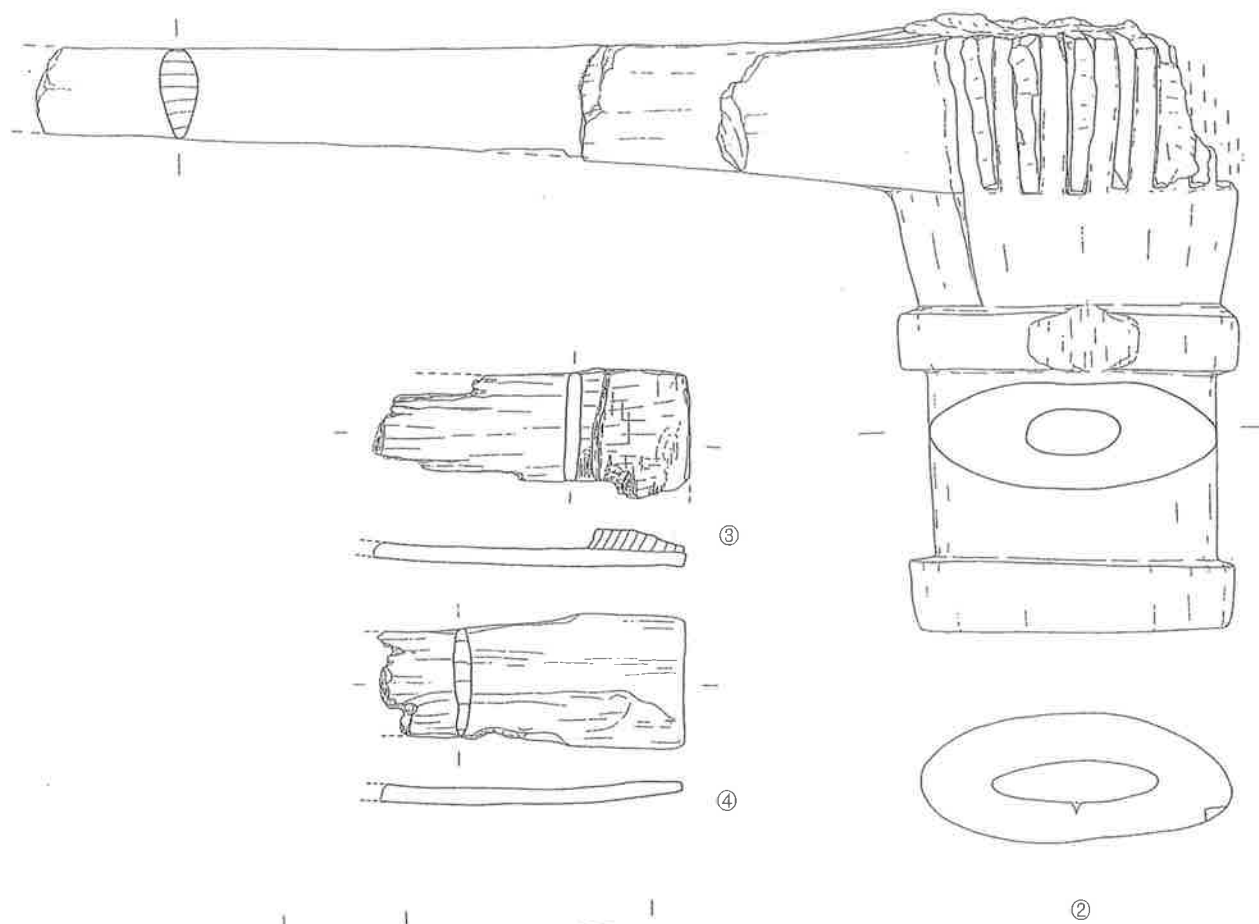
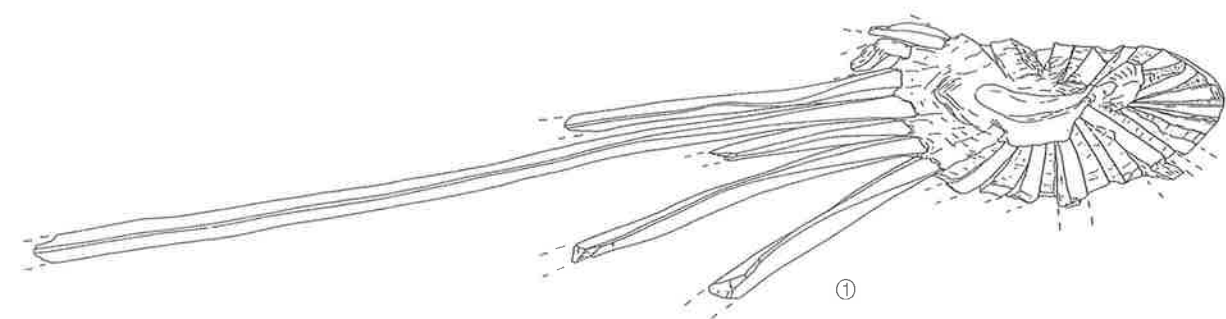


쇠스랑형괭이(木製叉柄鍬)



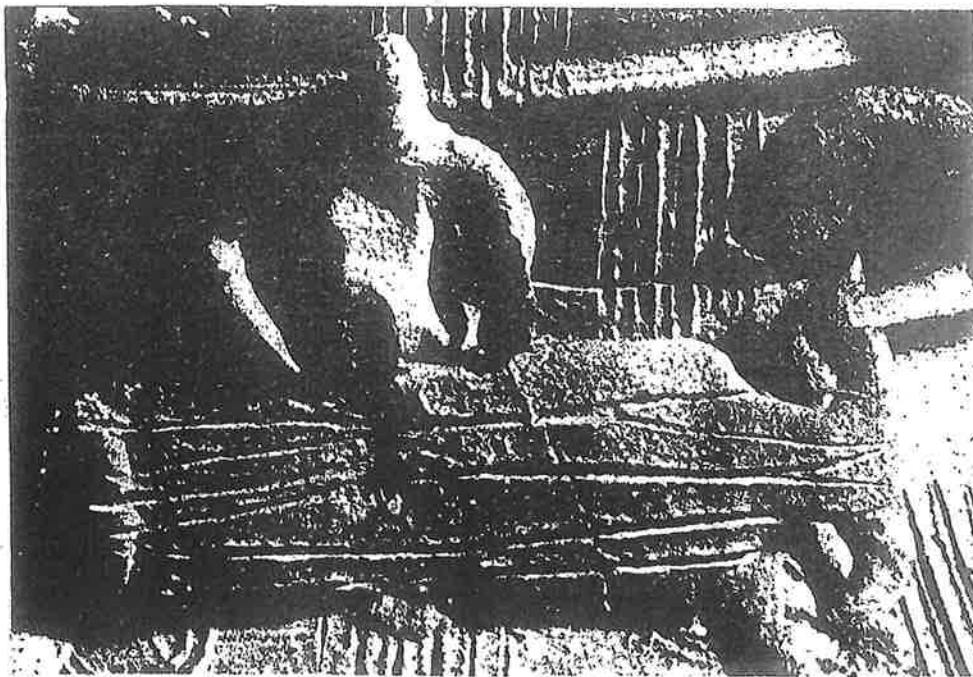
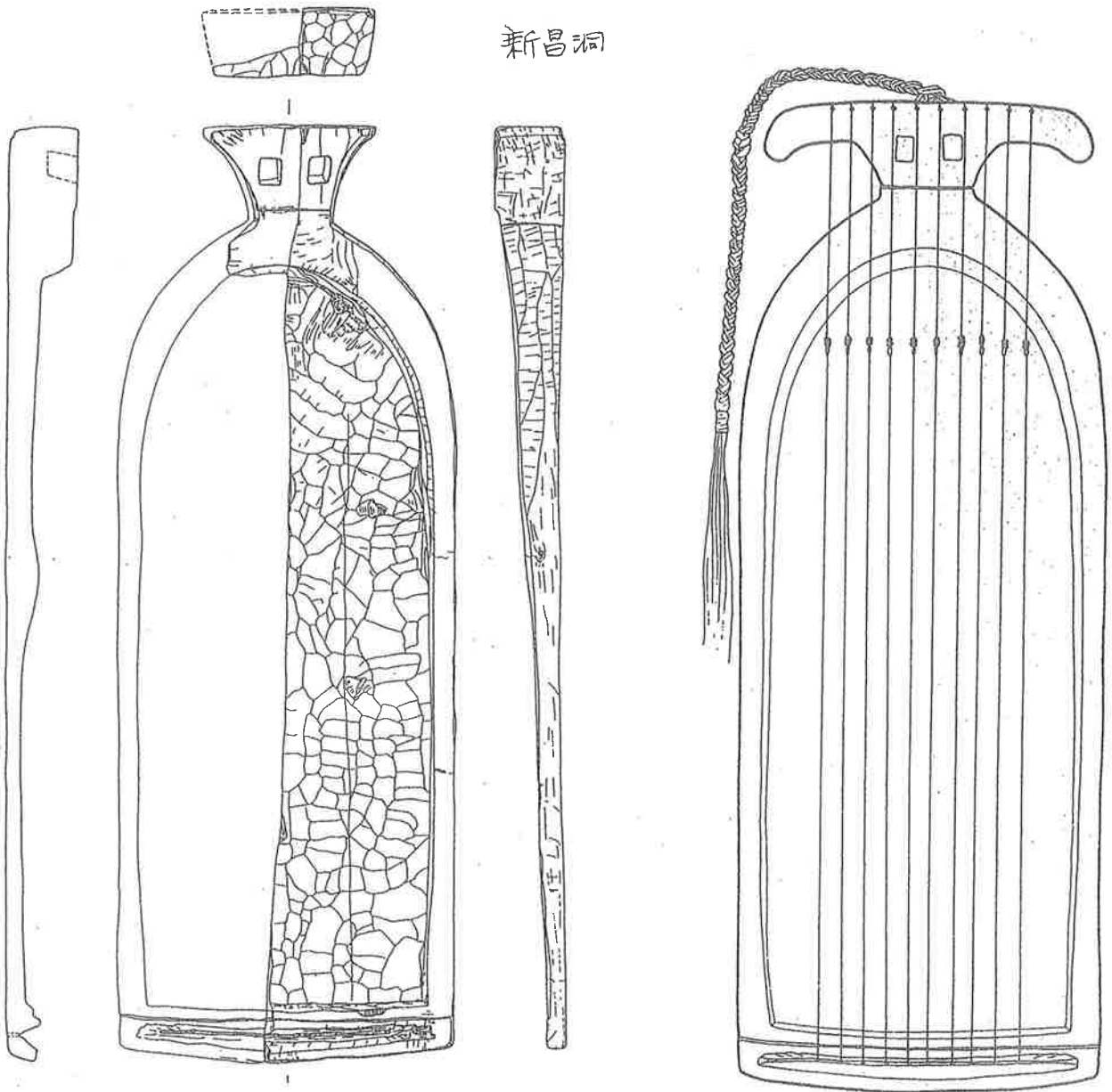
가로걸이대(車衡)

新昌洞遺跡



수레부속구(車輿具 側面 ①, 平面 ②), 바퀴살(輻 ③~⑤)

新昌洞



新羅土器

時代から引き続いて営まれた居住空間であったことを示している。それに対して、新たに集落が営まれ始めたところも知られる。この時代の代表的な遺跡が郭支里遺跡であり、その出土土器は郭支里式と呼ばれる。郭支里遺跡では、現在までに住居跡などの遺構は見つかっていないが、土器を大量に包含する文化層や貝層が認められる。土器は、赤褐色無文の深鉢形が主体を占め、郭支里Ⅰ式に編年される。この土器に、朝鮮半島西南端部に位置する全羅南道の郡谷里遺跡出土の典型的な土器が共伴することから、両地域間の交流がうかがえる。そして、郭支里Ⅰ式土器に対して、灰青色の灰陶質土器が伴う段階のものを郭支里Ⅱ式土器とされる。さらに、この時代の郭支里Ⅰ式・Ⅱ式土器の段階を、それぞれ耽羅前期・後期と位置づけられる。しかし、耽羅のことが、中国・朝鮮・日本の文献史料に見えるのは、『三国史記』などにおいて、五世紀後半以後のことであるので、むしろ、『後漢書』とともに、『三国志』魏書東夷伝の韓の条に登場する州胡の時代とすべきであろう。

それはともかく、原三国時代の集落遺跡としては、前出の三陽洞が重要である。ここでは、灰青色灰陶質土器が出土していないのに対して、濟州市の外都洞遺跡では、灰色軟質土器や灰色灰陶質土器が

出土していて、郭支里Ⅱ式土器段階と思われる。ここでは竪穴式住居跡のほか、貯蔵穴の可能性もある竪穴や井戸などの遺構群が検出されている。また、錦城里遺跡と終達里遺跡では、前述のとおり、貨泉が出土して注目されるが、後者の終達里遺跡では貝塚を伴う。海拔4m以下に形成された貝塚は、海岸線まで直線距離で約七五〇m地点に立地する。貝層から出土した遺物には、動・植物(ドングリなど)、魚貝、炭化豆・麦などが含まれ、狩猟・採集・漁労・農耕など、多様で複合的な生業活動の様子がうかがえる。この点は、海岸から2kmほど離れた、海拔三〇〜四〇m内外の比較的平坦な台地上に立地する外都洞遺跡とは対照的であるが、ここでは炭化穀物類が検出されている。一方、濟州市の龍潭洞では、石槨墓が見つかり、長剣・短剣・矛・板状斧・鏃・鏃などの鉄器が出土した。鉄器は、郭支里遺跡でも、铸造斧・鏃・刀子などが知られる。このように、多様な生活基盤に立ち、鉄器を使用する集落群があり、その中でも三陽洞は引き続き拠点的な集落遺跡であったことをうかがわせ、このことは州胡国の国都の姿を具体的に示すものといえよう。

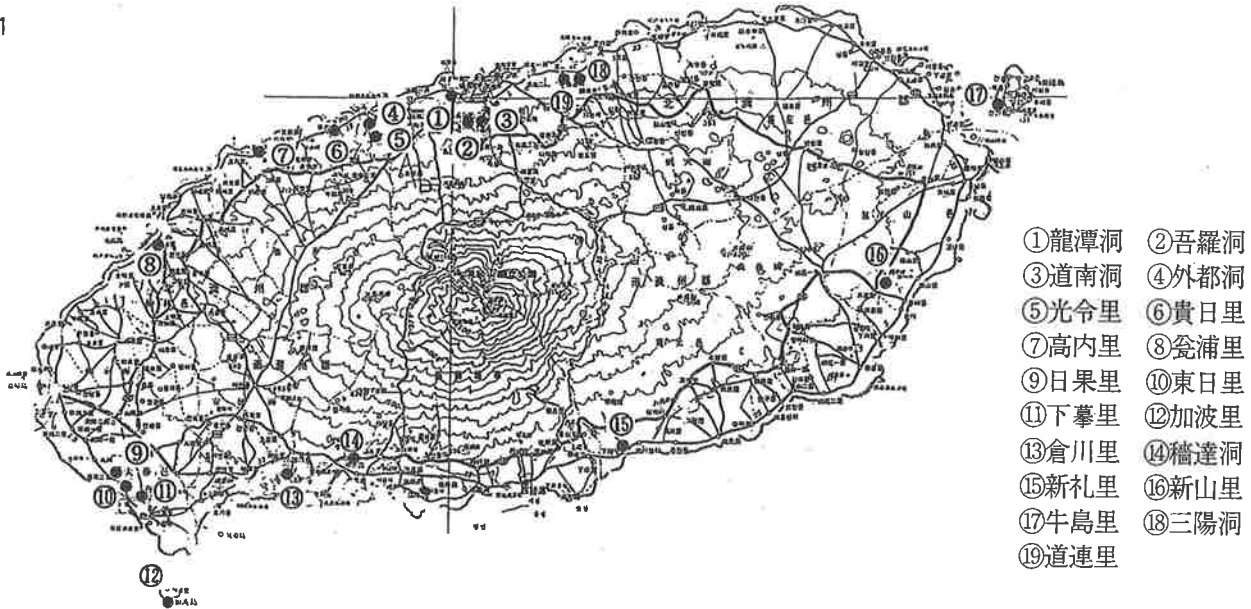
つぎに、濟州市の山地港内であつて中国貨幣と伴出した小形銅鏡の一面は、後漢の内行花文鏡を模倣して、北部九州で

製作された倣製鏡つまり倣鏡である。そして、この種の倣鏡の出土例は慶尚南道の沙内里でも認められる。他方、土器を見ると、慶尚南道の勒島遺跡では、弥生時代中期にさかのぼる古い時期のものであるが、初頭の城ノ越式から後半の須玖Ⅱ式までの弥生土器が出土している。そして、勒島遺跡が位置する南岸地域における、断面三角形粘土帯貼付や磨研の無文土器が、前出の濟州市の終達里遺跡では、外来系土器、いい換えれば搬入品として認識されるものがふくまれている。ちなみに、前述の郡谷里遺跡では、濟州島に特有な胎土に角閃石を含む土器が出土している。これらの諸事実から考えると、前述した濟州島出土の倣鏡は、北部九州から南岸地域を経て濟州島にもたらされた可能性が出てくる。つまり、これら諸地域間における相互交流を推測させてくれるのである。

最後に、それら遺跡群の様相には、弥生時代後期後半もしくは魏志倭人伝の時代の日本列島と共通点が少なからず認められることについてである。しかし、それは朝鮮半島南部の文化要素が一方は濟州島へ、そして、他方は日本列島へと、それぞれ波及した結果であると考えるのが自然であろう。

(にしたに ただし)

図1



ことを意味するのではなからうか。他方、中国製文物を出土する遺跡では、無文土器を見ると、口縁部に断面が円形から楕円形を経て、三角形に至る粘土紐もしくは粘土帯を貼り付けたものが見られる。これらの無文土器は、北部九州でいえば、弥生時代前期後半から後期初の遺物と共伴することがある。そのような中で、中期後半から後期初は、まさに前漢末から後漢初における倭と漢の間で国際的な交流があった時期に当たる。その意味では、濟州島の州胡国と北部九州の奴国の間には、漢との交流という点で共通性を見出すことができる。また、三陽洞遺跡はその規模から考えて、拠点集落もつとえば州胡国の国都の遺跡であり、玉環に象徴される漢の文物は、州胡国の国王クラスの首長層の威信財であった可能性をも憶測するのである。

ところで、三陽洞遺跡は、すでに早く一九七〇年代に、支石墓三基が報告されたことで知られるようになった。それらの支石墓は、このほど発掘された竪穴式住居群のうち、おそらく初期の住居群に関連するものである。濟州島の支石墓は、これまでに一九遺跡六三基が確認されている(図1)。それらの支石墓は、大まかにいえば、いずれも朝鮮半島西南部地方と同型式の、いわゆる南方式あるいは碁盤型に属する。しかし、たとえば、

濟州市龍潭洞の支石墓群のうち、たとえば一号支石墓で見られるように、上石の下部構造が石櫛のような石囲いをもつ特異なものがある(写真3)。これらは一見、島原半島の原山支石墓群の構造に似るところから、両者の関連性が指摘されたことがあるが、くわしく見ると両者の構造は異なっていて、両者間には関係がないようである。

III

原三国時代の濟州島は、一段と発展したようで、集落遺跡の分布が拡大する。北村里岩陰や三陽洞の遺跡は、無文土器

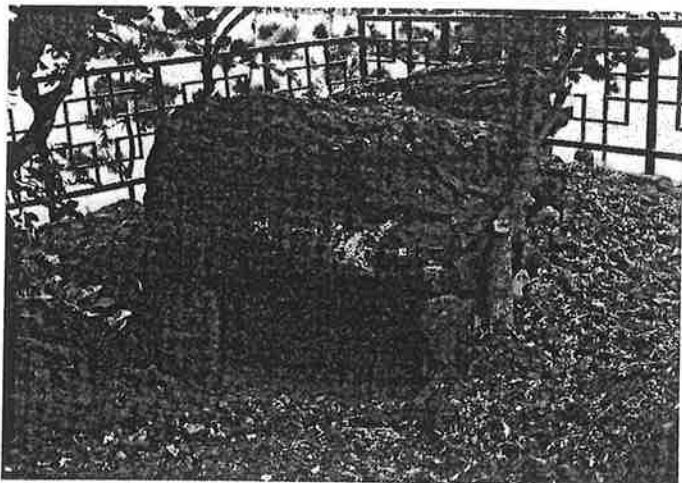


写真3

図1 濟州島の支石墓分布図
写真3 龍潭洞1号支石墓

ともかく、その後、弥生文化は発展し、後期には鉄器の時代に入るが、その源流となったのは、同じく朝鮮半島南部の原三国もしくは三韓の時代の文化体系である。

濟州島の無文土器文化といえば、支石墓を想起するほど、支石墓の存在は早くから知られてきた。しかし、最近では、それらの墓制を残した人びとの集落遺跡の発掘調査が大きく進展した結果、重要な成果が数多く見られるようになった。

南濟州郡にある上幕里遺跡では、口縁部に孔列文や刻目文を施す無文土器が、磨製石斧・石鏃や土錘・土紡錘車などと共伴したが、土器や石器は朝鮮半島本土部からの流入を思わせるほど、形式的に酷似する。ここでは、炉跡を伴う竪穴式住居跡や貝塚などの遺構も発掘された。貝塚からは、各種の貝類や動物骨が検出されたが、海岸部という遺跡立地を合わせ考えると、この集落が、狩猟とともに、漁労活動に大きく依存していたことを思わせる。

一方、同じ海岸部でも、少し内陸部に入ったところに立地する濟州市の三陽洞遺跡の調査成果は、植物性食料に対する依存度が高かったことを思わせる。三陽洞遺跡は、土地区画整理事業に先立って、濟州大学校博物館により、一九九七年から九九九年にかけて三年間にわたり緊急発

掘された(写真2)。海拔二〇m付近に立地する遺跡は、東西一・二〜一・五km南北〇・五〜〇・六kmに及び、およそ一〇万m²の範囲に広がる。発掘調査の結果、無文土器時代から原三国時代にまたがる大規模な集落遺跡であることがわかった。これまでに、竪穴式住居跡二二六軒・掘立柱建物跡二八棟などの遺構群と、土器・石器・鉄器など多種多量の遺物が検出された。そのうち、無文土器時代の住居跡が何軒分検出されているのか、いまのところ明らかにはされていないが、朝鮮半島西南部地方に特徴的な松菊里型住居が含まれることは興味深い。ち



写真2

なみに、松菊里型住居は、弥生文化形成期の北部九州においても知られる。三陽洞遺跡の松菊里型住居であるI区域一号住居跡からは、赤褐色無文土器とともに、磨製石剣・退化型細形銅剣や、豆や麦と思われる炭化穀物などが出土した。そして、II区域六号住居跡では、多量の磨製石器・石製剣把頭飾・鉄器のほか、玉環が朝鮮半島南部ではじめて出土した。とくに注目されるのは玉環であり、銅製三角鏃とともに、中国・漢の所産と考えられよう。そこで想起されるのが、かつて一九二八年に濟州市の山地港内で発見された、五銖銭・貨泉・大泉五十・貨布など、前漢から新にかけての中国貨幣である。そのうち貨泉については、最近でも濟州市の外都洞、北濟州郡の錦城里や終達里での出土例を追加している。このような中国製遺物の出土は、新以前あるいは前漢にさかのぼって、濟州島北部の地域集団と、おそらく楽浪郡を通じての中国との交流を物語るといえよう。ここで、『後漢書』東夷伝の韓の条を見ると、馬韓の西海に島があつて、そこに州胡国があるとし、続けて、船に乗って往来し、韓中と貨市すると記載する。このことは、後漢から見れば、少なくとも濟州島の北部を郡国制度下に編入しようと思つたことを示すとともに、州胡国が馬韓や、おそらく楽浪郡を通じて後漢と交流した

【特別講座】 濟州島と弥生文化

九州大学名誉教授 西谷 正

I

朝鮮半島西南部の沖合五九kmのところ
に位置する濟州島は、八つの有人島と五
四の無人島から構成され、その面積が一
八四五km²に及ぶ、朝鮮半島最大の島で、
行政区域上は濟州道に属する。濟州島は、
海拔一九五〇mの漢拏山が造った火山島
であるが、一二〇万年前から二万五千年
前までの間に、四回の火山活動があった
といわれ、島の各地に洞窟を数多く残し
ている。

濟州島における人類文化の足跡は、旧
石器時代にさかのぼる。北濟州郡にある
ピルレツモツ洞窟では、玄武岩製の大形
石器と剥片石器が出土している。前者に
は打割器・剥片斧と、後者には削器・石
刃・尖頭器などがそれぞれ認められる。
また、褐色熊・赤鹿・獐などの動物化
石も出土していて、六、七万年〜三万五
千年前の中期旧石器時代の特徴を備える
と報告されている。ついで、櫛目文(新
石器)時代に入ると、北濟州郡の高山里
遺跡で、早期の包含層が知られる。隆起

文・押引文に特徴づけられる櫛目文土器
とともに、多数の石鏃が出土したほか、
後期旧石器の伝統を継承した各種の剥片
石器や矢柄研磨器が出土している。これ
らの遺物を含む文化層の上には、六三〇
〇年前の鬼界カルデラ噴出物のアカホヤ
火山灰が堆積していて注目される。同じ
く北濟州郡の北村里遺跡は岩陰遺跡であ
る(写真1)。四つの文化層のうち最下
層からは、三角列点文や二重口縁無文の
後期櫛目文土器や、磨臼などの石器・骨
角器・貝類・動物骨・炭化種子などが出
土した。貝類のC測定結果は、およそ二
九二〇年前の年代が出ている。そして、
この時期になると、島内の各地で遺跡が
知られるようになる。このような旧石器
時代いらいの前史があつて、無文土器
(青銅器)時代が始まるのである。

II

朝鮮半島南部の無文土器時代の文化体
系が、日本列島とりわけ北部九州にまず
最初に受容されて、弥生文化の形成を見
るわけである。最近、弥生時代の開始年

代が、従来の通説より五〇〇年以上も早
い三〇〇〇年前までさかのぼるといふ問
題が提起された。しかし、考古学の立場
から考えると、従来の通説は再確認でき
る。とはいえ、自然科学のC年代測定
サンプル数を、弥生時代開始期を中心
に、その前後の時期まで広げて、さらに検証
を続けることが期待される。開始年代は

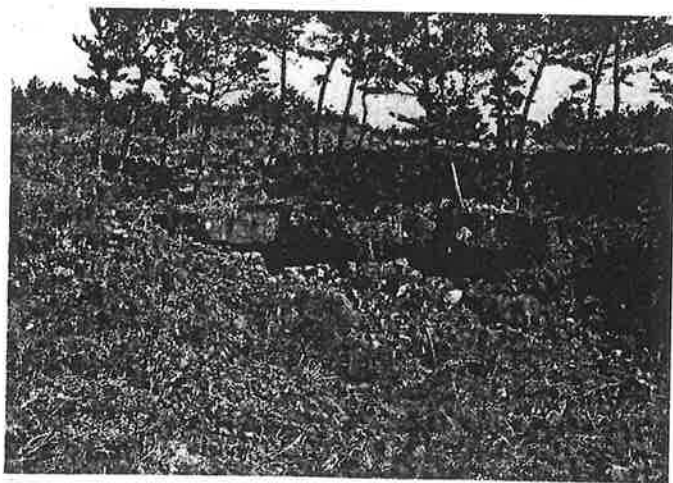


写真1